

【月刊】キリスト教書評誌

# 本のひろば

March 2021 3

ISSN 0286-7001

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2021年3月1日発行(毎月一回発行)第759号

● 出会い・本・人

娘たちの心を育んだ絵本たち 篠田真紀子

● 特集「青年への伝道」を考えるには

この三冊！ 木下喜也

● 本・批評と紹介

エリザベス・シフトン 著／穂田信子 訳 平静の祈り 高橋義文

J・カルヴァン 著／堀江知己 訳 旧約聖書註解 創世記Ⅱ 吉田 隆

カール・バルト 著／天野 有、宮田光雄 訳

教義学要綱 ハンデイ版 小原克博

土方 透 編著 世界社会の宗教的コミュニケーション 佐藤啓介

ドナルド・K・マッキム 著／原田浩司 訳

カルヴァンと共に祈る日々 澤 正幸

川中 仁 編 旧約聖書の物語解釈 金井美彦

サリー・マクフレイグ 著／山下章子 訳 ケノーシス 芦名定道

富坂キリスト教センター 編 日韓キリスト教関係史資料Ⅲ 徐 正敏

大井 満 責任編集 神の愛に満たされて 濱 和弘

長田栄一 著 旧約聖書の世界 大井 満

栗田英昭 著 聖霊と霊性 関川泰寛

福嶋裕子 著 ヒロインたちの聖書ものがたり キスト岡崎さゆ里

A・E・マクグラス 著／矢内義顕、辻内宣博、平野和歌子 訳

宗教改革の知的な諸起源 森田安一

大嶋裕香 著 絵本へのとびら 久米小百合

『信徒の友』記事に書き下ろしを加えて書籍化、信仰生活(再)入門シリーズ



## 信仰生活ガイド 信じる生き方

増田 琴 編

2021年2月15日刊行予定

礼拝の喜びや祈りの心構え、聖書の読み方といった日々の歩みから、悲しみとの向き合い方、多宗教社会における信仰生活のあり方、隣人と共に生きる姿勢にいたるまで、多岐にわたって取り上げる。

◆四六判 並製・128頁・1,430円

シリーズ好評発売中 各1,430円

『主の祈り』

『使徒信条』

『十戒』

『教会をつくる』

40年にわたって日本における讃美歌の歴史を追究してきた著者の集大成

# 日本における 讃美歌 Hymnology in Japan

手代木俊一

近代以降の日本における讃美歌・讃美歌集の歴史についての論考と、研究の先達たちの論文翻訳をまとめた集大成。明治期の讃美歌・聖歌、琉球語讃美歌に関する論考、ジョージ・オルチンに関する小論などを収録。

◆A5判 上製・506頁・7,150円

手代木俊一  
Teshirogi Shunichi

## 日本における 讃美歌 Hymnology in Japan

日本キリスト教団出版局

2021年2月25日刊行予定



## 娘たちの心を育んだ絵本たち

篠田真紀子

もう子どもではなくなりつつある娘たちに、一番心に残っている絵本は何？と聞いてみた。十七歳の長女は「はんぶんあげてね」（きのしたあつこ絵／文・日本キリスト教団出版局）、十一歳の次女は『こんとあき』（林明子作・福音館書店）だった。それは母の私には、あまり読んであげた記憶がないので意外だった。本が壊れるくらい読まされた『いないいないばあ』や『おちゃんときいろくん』でも『はらべこあおむし』でも『うずらちゃんのかくれんぼ』でもなく、母の読み聞かせが面白すぎた一緒に沢山笑い転げた『だるまさん』シリーズや『おならうた』でもないのか……。母としてはちよつとがっかり。でも娘たちは、もう自分で読めるようになってから読んだであろうその絵本から、ちゃんとそのメッセージを受けとめて、それぞれ自分の一冊を大切にその心に刻んでいたのだ。そういえば、我が家には「はんぶん」と題された絵本が複数ある。それは今の長女の生き方を形作っていく大切な要素になったのだと思う。次

女は、『こんとあき』の、こんがお風呂できれいに洗われたり、破れを縫われたりする場面が大好きなのだという。

私は、絵本を巡る娘たちの今を知って思う。コロナ禍にあつて娘たちは、この世の不条理や醜さを経験させられ、生きるとは何か？を問われた。そして、政治家も教師も親たちさえもが、大人の論理でコロナに対処し、無理にこれ乗り越えさせようとしていることに傷ついているのではないか。娘たちは、絵本の中にある世界——隣の人に寄り添い、喜びも悲しみも分かち合い、担い合い共に生きる世界——が実際の世にも実現できると信じてやまない。そして、そのために生きようと、それを阻むものたち全てに必死に抗って、苦しみがいているように思えてならない。

「あなたがたに平和があるように。」（ヨハネによる福音書二〇章）  
（しのだ・まきこ 〓 日本基督教団浅草教会牧師）



## 「青年への伝道」を考えるには

# ▼この三冊！

木下喜也

(きのした・よしや・日本基督教団金城教会牧師)

青年への伝道は、教団教派を問わず日本のキリスト教会の喫緊の課題です。私自身は、日本基督教団の教師として、教団内の青年伝道の責任を担う経験を比較的多く与えられましたが、それでもなお青年伝道の困難と限界を感じる一人として、この課題に向き合うみなさまの一助となれるよう、筆を執らせていただきます。

最初にお断りしますと、ここでご紹介する三冊は、いわゆるノウハウ本というわけではありません。あくまで、

「考えるための書物」であり、取り組んでいくのはそれぞれの教会でありみなさまご自身となります。取り組みの中で、自分自身の姿勢や、教会の姿勢も変えられていく必要があるかもしれません。しかし、こういう変化を恐れずに、取り組んでいく姿勢がなければ、

どんな良著を読んでも意味がないと思います。

もう一つ大切なこととして、青年伝道の伝える内容自体を、教会の外に求める必要はないということです。ここ

で、

なった事実からも、日本の教会が待ち望んでいた書物だと思えます。

著者の大嶋先生は、K G K(キリスト者学生会)の主事として、常に最前線で青年と向き合って青年伝道に専心されてきました。その豊かな経験の中で、どれだけ時代が変わっても、変わらない青年時代特有の課題が三つあると語られます。それは、①「本当の自分は何か？」というアイデンティティの問題、②「愛するとは何か？」という恋愛・結婚・性の問題、③「自分にどこに進むべきか」という自分の将来の問題です。大嶋先生は、私たちに對して、そのような若者の課題に答えているだろうか、心に届く説教となっているだろうか、信仰継承を本気で実践する教会となっているだろうか、と問いかけます。

本書の特徴の一つは聖書的・教会的なことです。大嶋先生は、神戸改革派

神学校で学ばれた神学的な背景があり、語られる言葉の一つ一つは聖書の根拠があります。実は、私自身が、本書をきっかけにして、属している地域の有志の若手教職たちと中高生キャンプを発足することになったのですが、大嶋先生は講師兼アドバイザーとして、プログラム作りから担ってください、キャンプでも力強くメッセージを語ってくださいだったので。言わば本書の「実践編」を目の当たりにしたのですが、そこで何度も語られたことは、このキャンプから、それぞれ教会に戻って、教会青年として責任をもって生きようという派遣のメッセージでした。そして、このキャンプに参加した何名もの中高生たちが、それぞれの教会で受洗・信仰告白をしてくれたという、うれしい報告を受けております。

加藤常昭著『黙想と祈りの手引き』

ご紹介するいずれの書物も、これまで教会が大切にしてきた聖書や教理を伝えることを主眼としたものとはかなり異なります。聖書に基づいて伝えないのであれば伝道にはならず、そもそもそれならば教会以外でなされていることの方がよほど上手で、太刀打ちできません。つまり、伝え方については自分が変えられていく柔軟さが必要ですが、伝える内容については、芯の通った姿勢が必要になると思います。

大嶋重徳著『若者と生きる教会』

この書物は、迷わず第一に掲げたいと思います。実は、私自身が責任者として携わっていた研修会に、著者である大嶋重徳先生が講師として講演された内容が書物となったものです。しかし、そのことを抜きにして、本書をきっかけに、大嶋先生が教派を問わず色々なところで講師として呼ばれるように

次に掲げる書物は、この主題には一見ふさわしくないように思えるかもしれませんが。しかし、二〇〇四年夏に行われた日本基督教団改革長老教会協議会主催の青年修養会における加藤常昭先生の講演録を基礎にした、青年たちに語られたものです。この修養会には、私自身もスタッフとして参加しており、青年たちの心に確かに届いている様子を目の当たりにしたこともあり、紹介したいと思いました。

この当時、著者であり講師であった加藤先生は、既に日本基督教団の隠退教師として七〇歳を超えていましたが、若者向けに特に奇をてらうことなく、祈りと黙想について静かに語られる神学的な講演に、私も含めて青年たちは引き込まれていたのです。年齢差は問題ではないという実例としても一読に値すると思います。

本書の構成は、個人の祈りから、黙



想への勧め、そして共に祈る祈りへと広がっていくもので、どの章も具体的であり実践的なものです。著者自身が、青年だけに限らず「祈りを学ぼうとする方ならどなたにも語りかけたという思い」(あとがき)があるように、祈りを学ぶためのまさに「手引き」となります。

その中で、特筆すべきは黙想の手引きです。黙想とは、「神の言葉を聴く沈黙の行為です。沈黙の時です。黙想というのはいま何よりも黙って神の言葉を聴くことです。」具体的な方法は、本書に詳述されていますが、この時の修養会でも青年たちは、プログラムの中でこの黙想を実践いたしました。以降、この黙想は「ブーム」になり、当時私が赴任していた教会で、この修養会に参加した青年たちの集まりで聖書の黙想を行い、それぞれが黙想から与えられたことを共有したのです。私は個

人的に、青年伝道の実りの一つは、聖書を語り合う「文化」が根ざしていることだと考えております。

最初の書物の著者である大嶋先生と加藤先生とは、年代も教団も違うのですが、聖書の御言葉に集中するという面では共通する点があります。更にお二人はあるラジオ番組で対談しており、青年特有の課題というのは、時代が変わっても変わらないという点で意気投合していたのが印象的でした。

ドロシー・セイヤーズ著『ドグマこそドラマ』

最後に掲げる書物は、更に意外な印象を覚えるかもしれません。著者のドロシー・L・セイヤーズは、二〇世紀前半に英国で活躍された作家であり、欧米ではアガサ・クリステイと並んで「ミステリの女王」と言われたそうです。本書は、キリスト者である著者の論

適切に、かつ欲ばしく発揮されることによって神の栄光のために完成されるような、そんな生き方の一つとして仕事を発見することができないものか」と問いかけています。働くことが神の創造の姿を表すもので、神に献げる手段とさえ捉え直されており、これは「生活のために働く」という風潮に対して一石を投じるものです。しかも、驚くべきこ

とに、このような働くことへの態度が平和につながるというのです。第二次大戦中のヨーロッパを生きられた著者ならではの言葉ですが、働くことが生活の手段と考える生き方は浪費社会につながり、その行く末は究極の浪費である戦争になるということです。自分たちの生き方や精神的態度が、世界を変えるということは、今の時代にも通じ

### 『若者と生きる教会』

伝道・教会教育・信仰継承  
大嶋重徳：著  
教文館  
2015年刊  
A5判114頁  
1200円(税別)



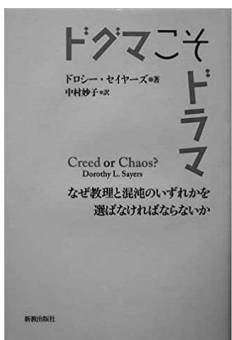
### 『黙想と祈りの手引き』

加藤常昭：著  
キリスト新聞社  
2006年刊  
四六判270頁  
2400円(税別)



### 『ドグマこそドラマ』

なぜ教理と混沌のいずれかを選ばなければならないか  
ドロシー・セイヤーズ：著  
中村妙子：訳  
新教出版社  
2005年刊  
四六判184頁  
1900円(税別)



文や講演を集めたものです。この表題が示すように、ドグマ、つまり教理というのは、ドラマティックなものであるということが伝えられています。当時の教会で、教理というと退屈な印象を抱きがちで、特に「教理的な説教」は面白くないという風潮があったのですが、それに対してはつきりと語りま

す。「教理を軽視しているからキリスト教は退屈なものになっていくのです。キリスト教の信仰は、人間の想像力にシヨックをあたえる刺激的なドラマです。ドグマこそがドラマなので

す。」教理が退屈ではなく、教理を退屈にしている教会の責任を問うもので、これは、今の私たちこそ聞くべき言葉だと受け止めました。

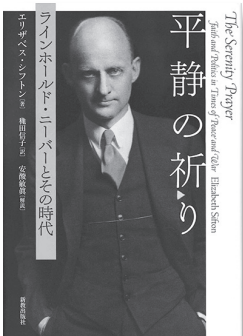
本書の中で、特に衝撃的だったのは、「人はなぜ働くのか」という章です。著者は「金銭を得るためのやむをえない苦役としてではなく、人間の本性が

るものであり、青年時代にこそ触れてほしい主張と思われました。

働くということの一つの例として、著者は「日常生活を重要視していない教会に、人びとは関心を持たない」と主張しており、これは青年伝道がはかどらない一つの理由としても、私たちが耳を傾けるべき言葉と思えました。

## 魅力的でユニークな書

〈評者〉高橋義文



平静の祈り

The Serenity Prayer  
Reinhold Niebuhr  
Eriq Zaves and Shifun  
ライnhホルド・ニーバーとその時代  
エリザベス・シフトン 著  
高橋義文 訳  
2015年11月15日発行  
201頁  
1,600円

平静の祈り

ラインホルド・ニーバーと  
その時代

エリザベス・シフトン 著

穂田信子訳



魅力的でユニークな書が訳出、出版されたことを喜びたい。本書の魅力とユニークさは、まず、有力な出版社で活躍した著名な編集者であった著者エリザベス・シフトン（一九三九―二〇一九）が、二十世紀を代表するアメリカの神学者ラインホルド・ニーバーの娘であることにある。ニーバーのよく知られた「平静の祈り」の背景と想い出を縦糸に、父ニーバーをめぐるさまざまな出来事と各界の著名人たちの交わりと、第二次世界大戦中のヨーロッパをも含むその時代の世界の動向を横糸に、エリザベスの目に映った二十世紀後半の景色が独特な筆致で生き生きと表現されている。さらに、本書には、父ニーバーを慕う思いがにじみ出る暖かい描写と、世界の動向に対する鋭い洞察とが、せめぎ合うように息づいている。

そして何より、ニーバーが一九三二年から一九五五年ま

でマサチューセッツ州ヒースに所有していた別荘「ストーン・コテージ」（訳書では「石のおうち」と、ヒースの土地柄へのエリザベスの哀惜の念が全巻を通じて伝わってくる。

ニーバーが有名な「平静の祈り」をささげたのは、一九四三年の夏、この山村の教会の礼拝においてであった。この祈りについては、その歴史や作者や文言をめぐるさまざまな誤った情報が錯綜してきたし、それは今も変わらない。それらの情報を批判するエリザベスの激しい口調は、エリザベスがいかに父の祈りの言葉を大切にしてきたかの表れであろう。

この祈りについて本書に特徴的なのは、それを実存的個人的な意味よりもそれを踏まえてではあるが、一貫して「困難を極め、分断された時代における数々の闘争と危難」とりわけ「同盟国が枢軸国に勝利する見込みも定かではな魔法」を理解し、それに感謝していたひとりがマーティン・L・キングであったとも言う。ニーバーの公民権運動への隠れた影響を示唆する指摘である。

一方、本書には、娘ならではのニーバーの個人的な情報も豊富である。たとえば、父は讚美歌を「完全に外れた音程」で勢いよく歌っていたとか、「あの気の短い父」といったくだりにはほっとさせられる。あるいは、ニーバーがその創立者の一人となった政治団体「民主的行動のためのアメリカ人」（ADAA）の主要メンバーとのニーバー家での交わりは、「弁の立つアンガー・ジュマン的いところが大勢いる大家族のよう」だったとも言われる。ニーバーが政治世界の友人たちに慕われていた様子が垣間見られるひとこまである。

本書は、ニーバーにサイドライトを当てた、それも娘の立場からなされた、ユニークな著作である。それ自体独特の光を放っているが、同時に、ニーバー研究にとっても必須の文献であることは言うまでもない。

巻末の、安酸敏眞教授による「解説」も、ニーバー家の情報の数々に加えてニーバーの恵みの神学への深い考察が込められていて、魅力的である。

（たかはし・よしづみ 聖学院大学総合研究所名誉教授）

（A5判・三六〇頁・本体四五〇〇円＋税・新教出版社）

かった」戦中の状況を背景として、受け止めていることである。「この祈りの歴史的意味を、荒れ狂った今世紀の最大の悪のひとつに対して起こされた戦争と、切り離して考えることはできない」からである。しかしその上で、エリザベスは、この祈りの根底には、この祈りをささげるほんの一年前に出版準備されていた『人間の運命』の結びに置かれた次の言葉があると主張した。「われわれの最も信頼できる知性は『恵み』の果実である。この恵みにおいて、信仰は、その確かな根拠を知識として所有していると偽ることなくわれわれの無知を満たし、この恵みにおいて、悔い改めは、われわれの希望を損なうことなくわれわれの傲慢を軽減するのである。」言わば、「平静の祈り」がニーバーの『恵みの神学』に根差しているということであろう。正鵠を射た注目すべき視点と言つてよい。

本書は、ニーバーが交流した驚くほど多くの人々の群像を、エリザベスの眼から多彩に描いている。そこには、特にボンヘッフアーと大戦中の活動をめぐるかなり詳細な記述や、ニーバーの学生だったM・ホートン（南部のハイランド・フォークススクールの創立者）への懐旧も含まれる。また、ニーバーの親友A・ヘッシェルに触れて、エリザベスは、「ヘッシェル―ニーバーの親和力が引き起こす化学の

# 興味尽きない カルヴァンの読み

〈評者〉 吉田 隆

カルヴァン  
旧約聖書註解  
創世記Ⅱ  
堀江知己訳



新教出版社

旧約聖書註解  
創世記Ⅱ  
J・カルヴァン著  
堀江知己訳



一九八四年に『創世記Ⅰ』が渡辺信夫訳で出版されて以来、実に三十六年ぶりの快挙である。

「高年齢になった渡辺先生には何としても『創世記Ⅱ』を仕上げていただきたいと、訳稿の整理や清書など手伝えることがあれば何でもします」と新教出版社に申し出たのが数年前のことだった。ところが、先生は全く翻訳に手を付けておられないとのこと。話を私に振られたのは、やぶ蛇であった。そうでなくとも能力も時間も足りない私では、どうにもならない。神学校の休み毎に少しずつ進めてみたものの、蝸牛のようにしか進まない。

堀江知己氏が引き受けてくださるとの知らせを出版社から受けたのは、そんな時であった。堀江氏と言えば、オリゲネス『イザヤ書説教』（日本キリスト教団出版局）やカルヴァン『アモス書講義』（新教出版社）を、次々と翻訳出版

されている旧約聖書解釈史の新進気鋭の研究者である。私は（比喩としては全く不適切だが）あたかも詩編歌を自作しようとして数篇で挫折したカルヴァンがベザの才能を見出して歓喜したように、文字通り諸手を挙げて喜んだ。

堀江氏は驚くようなスピードで訳業を成し遂げられた。渡辺氏の堅実な訳文とは一味違う自由闊達な訳文で、生き生きとしたカルヴァンの文章になっている。奇しくも渡辺先生が召されたこの年、意気消沈していた私たちに、神は若くて有能なカルヴァン研究者をお加えくださった。これを機に、カルヴァンの聖書註解の残された翻訳事業が、再び動き始めることを心から願う者である。

さて、カルヴァンの『創世記註解』の出版事情や意義については本書「訳者あとがき」をご覧ください。ことに、ここでは同書を手にとって読む楽しみを少しだけ御紹介した

- い。創世記後半の註解は、ヤコブの「選び」やヨセフ物語の「摂理」信仰といった神学的関心もさることながら、混沌とした族長物語に重ねて語られるカルヴァンのコメントが実に興味深いからである。たとえば（括弧内は註解箇所）――
- \*カルヴァン時代の「花嫁衣裳」とは？（二四・六）
- \*騙されたイサクと牧師の仕事の関係？（二七・二二）
- \*ラケルの水汲みと家庭教育（二九・四）
- \*族長たちを真似てはいけないことは？（二九・三〇）
- \*リスク管理の優先順位とは？（三二・二三）
- \*若者教育と結婚の指導（三四・一、四）
- \*いつの時代でも権力者が懼る病とは？（三四・二一）
- \*カルヴァン流・老いの迎え方（三五・二八）
- \*カルヴァンの「夢判断」？（三七・五）

- \*自分の容姿について（三九・六）
  - \*余りに妻の言いなりになっている夫は？（三九・一九）
  - \*誕生日パーティーは是か非か？（四〇・一九）
  - \*「先の見えない状況」での二つの行動（四三・二一）
  - \*ユダヤ人に寛大すぎるカルヴァン？（四九・一〇）
  - \*宗教団体は人に厳しすぎる？（五〇・一七）
- ――これらの答えは、本書を直接手にとってのお楽しみ！
- カルヴァンにとって族長物語とは、世俗のただ中で、同じ神に仕えて生きる「キリスト教会」の物語に他ならない。それ故、そこに描かれていることは、まさにカルヴァン時代の（そして今日の！）教会の姿なのだ。

（よしだ・たかし）神戸改革派神学校校長  
（A5判・三九八頁・並製・本体四五〇〇円＋税・新教出版社）

なお上製函入版は本体六〇〇〇円

## 信仰生活(再)入門シリーズ

# 信仰生活ガイド 教会をつくる

全5巻  
古屋治雄 編



第4回  
記本

教会形成、教会の儀礼、教会運営、教会生活にまつわる記事14本を収録。教会の本質や使命、役割と聖礼典、教会生活における喜びと慰め、祈禱会、献金、役員会、招聘などを取り上げる。四六判・128頁・1430円

## ナウエンの名著セレクション

# ナウエン・ セレクション アダムの神の愛する子

ヘンリ・ナウエン 宮本憲訳 塩谷直也解説



第2回  
記本

生涯「居場所」を求め続けたナウエン。ハーバード大学教授としての生活に行き詰まった彼は、ラルシュにてことばで意思を表現できない青年・アダムと出会い、そのケアに苦勞するうちに「居場所」にたどりつく。四六判・192頁・2200円

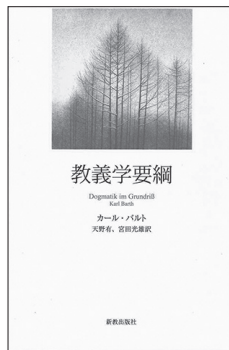
## 日本キリスト教団出版局

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18  
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457  
E-mail eigyou@bp.uccj.or.jp 《価格10%税込》  
<https://bp-uccj.jp>



# 随所に新鮮な出会いを 与えてくれる新訳

〈評者〉 小原克博



教義学要綱  
Dogmatik im Grundriss  
von Barth  
カール・バルト著  
天野有・宮田光雄訳  
新教出版社

教義学要綱 ハンデイレ版  
カール・バルト著  
天野有・宮田光雄訳



名著は繰り返し読み直され、その時代にふさわしい新しい命を吹き込まれてきた。本書も、その一冊に数えられるべきものである。新訳刊行のいきさつを最初に記しておこう。

バルトの訳書を多く手がけてこられた天野有氏が急逝された後、遺稿の中から完成に近い形で本書草稿が発見され、それに対し、宮田光雄氏が全面的な訳文見直しを行った末にできあがったのが本書である。一人の卓越した訳者のおかげで、バルトの肉声に近い《語り》が見事に再現されている。

カール・バルトを「二十世紀最大のプロテスタント神学者」と呼ぶことに対しては、おそらくバルトに批判的な立場の人であつても同意せざるを得ないほどに、バルトは広範囲な影響を及ぼしてきた。とはいえ、時代は二一世紀。

私の学生時代には、神学を学ぶことはバルトを読むことである、という雰囲気はまだ残っていたが、今、若い人に限

下書き原稿なしで講義をした」と記している。《読む》代わりに《語る》ことの必要性をバルト自身が感じたのである。バルトの《語り》に誘われて、読者はバルトの世界へと足を踏み入れることになる。

本書のもう一つの意義は、バルトへの関心の有無にかかわらず、私たちの信仰の基本を考え直すきっかけを多数与えてくれるということにある。本書は使徒信条に対する教義学的な講解となっている（全二四章）。キリスト教信仰の要点を凝縮した使徒信条は多くの教会で信仰告白として唱えられてきた。最初は難解に感じた文言も、繰り返し唱えている内に、わかったつもりになるものだ。そういう人にはぜひ本書を手にとって欲しい。バルトは、キリスト教信仰にとって決定的に重要な《出会い》であるという（二

らず、教会の信徒にとつても、難解な印象のあるバルトは近づきたい存在のようだ。それだけに、今回の新訳は時宜に合ったものといえる。

本書の意義は大きく二つある。一つは、バルト神学の最適の入門書だということである。バルトの神学的思索のエッセンスが本書には詰め込まれている。本書は最初に一九五一年の井上良雄訳として刊行され、一九九三年に「新教セミナーブック」の第二冊目となり重版され、読み継がれてきた。井上訳は「である」調で硬質な論文のような体裁を取っているのに対し、新訳の本書は「ですます」調でオリジナルの講義の雰囲気を伝えている。

本書は、戦後間もない一九四六年、バルトがボン大学の夏学期に行った講義が元になっている。本書「はしがき」でバルトは「私は、生まれて初めて、厳密に書き起こした章）。《出会い》なしには信仰は情性化するしかないだろう。本書は各章で私たちの思い込みを打ち砕き、新たな視界を開いてくれる。宮田氏が「訳書あとがき」において、最後の審判（二〇章）の講解を初めて読んだとき「目からうろこが落ちる」ような衝撃を受けたと記しているが、同じような感覚を私自身も持った。生ける者と死ねる者とを裁くイエスは、かつてご自身を神の裁きに捧げた方なのであり、それゆえイエスの再臨は《喜びの使信》なのである。このような新鮮な《出会い》が本書の随所で与えられる。

バルトは教義学の主体は教会であり、それは聖書釈義と実践神学の間に置かれていと語る。本書が教会の中で読まれ語られ、実践への力となること願う。

（こはら・かつひろ）同志社大学神学部教授  
（小B六判・三五六頁・本体二〇〇円＋税・新教出版社）

**ヨベルの新刊案内**

**大頭真一** 焚き火を囲んで聴く神の物語・説教篇⑧  
**栄光への脱出** 出エジプト記 新書判・一九二頁 二一〇〇円  
 待望の最新刊！

神はねたみ深く、民のうなじはコワイ。この旅、とても他人事とは思えない！

神の民の旅路は、世界的危機の時代に生きる私たちにとって無視できない鮮烈な表象に満ちている。脱出する。荒野をさまよう。約束の地をめざす。現代人の生き方にとつ語るか、第3弾！

**金子晴勇** キリスト教思想史の諸時代  
**アウグスティヌスの思想世界**

反響の第二回配本

キリスト教思想史の諸時代  
 アウグスティヌスの思想世界  
 その中心思想を、不安心として捉え、心の哲学から「個性」へと展開された神学をたどる。

Ⅰ「ヨーロッパ精神の源流」(既刊)  
 Ⅱ「アウグスティヌスの思想世界」  
 Ⅲ「ヨーロッパ中世の思想家たち」  
 Ⅳ「エラスムスと教義世界」  
 Ⅴ「ルターの思索」  
 Ⅵ「宗教改革と近代思想」  
 Ⅶ「現代思想との対決」

予約受付中！  
 新書判・平均256頁・各巻本体1,200円

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp  
 〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1-5F  
 TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858  
 出版の手引き / 呈 (税別)

## 現代世界で宗教にしか 担えない働きとは？

〈評者〉  
佐藤啓介



世界社会の宗教的  
コミュニケーション  
共鳴の醸成  
土方 透編著



本書は、二一世紀という「脱宗教化」の時代、そして、「脱宗教化」後の時代における宗教のあり方を、主に社会科学の観点から考察した一冊である。二〇一八年に聖学院大学にて開催されたシンポジウムをもとにした書籍であるが、学術書であると同時に一般書でもあらんとする狙いをもっている。編者である社会学者の土方透氏が全体を企画したものであり、社会学者・故ニクラス・ルーマンの未発表論文「宗教は不可欠か」の邦訳が掲載されている点も、注目すべきだろう。本書全体の狙いや意図を理解するためには、土方氏が執筆した複数の章を、本書全体を貫く縦軸として理解していくとよいだろう。

表題にある「宗教的コミュニケーション」という語によって、読者は「宗教間対話」の議論を想起するかもしれない。だが、本書のユニークなところは、諸宗教を語る、

の枠組みが提示されていることが本書の魅力であろう。

そのうえで、自らの宗教内部から他者（他の宗教やその等価物である世俗社会）へと語りかけていくコミュニケーションのうち、「宗教でなくては担うことのできない働き」を見いだしていくことが、本書の目標となる。幾人かの執筆者は、その機能を政治的・社会的次元における「利他性」の促進に見いだし、また土方氏は、宗教が「豊饒なフィクション」としての死後生の側から、私たち人間が生きている現在の生の意味を根源的に問うてくる点にその機能を見いだししている。

「宗教間対話」論以後の現代、そして、近年宗教研究では避けて通ることのできない「ポスト世俗化」の現代という状況を適切に見据えながら、「現代社会において宗教が

という視点をあえて放棄することで、宗教間対話とは異なる宗教間コミュニケーションの可能性を探ろうとしている点にある。「宗教を問うことではなく……宗教から問う、それも徹底して一つの宗教に定位して問うことによって、自身の原理主義的な閉鎖性を自ら開いていく途を示唆する」(二四六頁)ことを、現代的な宗教間コミュニケーションの始まりに据えようとする。また、しばしば、宗教間対話論の問題点として、宗教「間」対話にのみ関心が向き、「宗教と世俗の間」の対話に開かれていないことが指摘されてきた。本書は、そうした問題に対する一種の社会的応答でもあり、宗教と世俗社会との相克や交渉もまた、その機能に着目するならば、実質的には宗教的コミュニケーションの一種として考察しようと提案する。このように、機能

社会学の観点から、古典的な宗教間対話論とは異なる議論

必要かどうか」というありがちな問いを、社会学的な「機能」に着目して翻案し、「現代社会で宗教（およびその等価物）にしか担うことのできない働きを見いだすことができるか」と問い直した点に、本書の魅力と意義が存在すると評者には感じられる。それは、ウェーバーやルーマンの議論を深く理解する社会学者が執筆陣に並ぶ本書の優れた特長であり、日本国内のキリスト教学において欠落しがちな社会学的視点からの重要な問題提起でもあると思われる。(さとう・けいすけ 南山大学人文学部准教授)

(四六判・三五二頁・本体三二〇〇円＋税・聖学院大学出版会)



## CATS 日本キリスト教会 大信仰問答

〈ビジュアル版〉

日本キリスト教会\*著



### 日本で書かれた 「信仰問答」!

「読みやすく、楽しく手に取れるように」と企画されたカテキズム。写真、絵画、イラスト満載。総ルビ、オールカラー。

A5判変型判

定価【本体 1,800 + 税】円  
ISBN9 78-4-86325-129-8

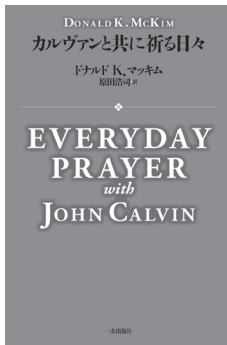


株式会社 一麦出版社  
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10  
TEL (011) 578-5888  
<http://www.ichibaku.co.jp>  
携帯 [mobile.ichibaku.co.jp](http://mobile.ichibaku.co.jp)



祈りにおける  
「聖徒の交わり」を信ず

〈評者〉澤 正幸



カルヴァンと共に  
祈る日々  
ドナルドK・マッキム著  
原田浩司訳



著者と接すること

昨年亡くなられたカルヴァン学者の渡辺信夫先生から、本を読む時、著者と一度でもあったことがあるかどうか、それで本の読みが全く変わってくると聞かされたことがある。幸い筆者は一〇年前、ドナルド・マッキム博士夫妻を福岡の地に迎えて数日、親しい交わりの時をもたせていただいた以来、今も、折々にメールのやり取りを続ける仲にある。マッキム博士の著作には顕著な特徴がある。二つあげれば、マッキム博士が編集した『リフォームド神学事典』（いのちのことば社）に見られるように、多くの神学者とのつながりを生かして、論文集や辞典を編纂されること、それと『長老教会の問い、長老教会の答え』（二麦出版社）といった信徒向けの入門書を出されることである。筆者はあ

いのか質問したところ、自分は何か独創的な著作を生み出すよりも、古今東西の優れた神学者とその著作を多くの人に紹介し、広汎な読者がその信仰的賜物にあずかるようにすることに使命を感じているからだと言えられた。マッキム博士の人柄は実に柔和で、友情に厚く、愛と親切心に溢れている。その人柄が、このたび出版された『カルヴァンと共に祈る日々』からも滲み出ているように思う。

祈りと神学

オランダの神学者ヘンドリクス・ベルコフはその教義学の中に「祈り」の章を設けているが、その章の註で、教義学でまったく「祈り」についての記述のない著作は多いことを指摘している。バルトは神学講義を、礼拝を始めるように賛美と祈りをもって始めたようだが、大学の神学部などでも「祈る」ことのない神学講義を聴講している人は多


いのではないか。本書に収められている15篇の祈りは、すべてそれをもってカルヴァンが聖書講義を結んだ祈りである。神学は生ける神との交わりの中で、聖霊の光に照らされ、認識し、思考し、語るものであることを、これらの「祈り」がはっきりと示している。

デボーションをこえる用い方

著者はこの書をデボーション用に、すなわち信仰者が個人で、日々の祈りの伴侶として用いられるように工夫を凝らしている。これはコロナで巣籠もり生活を強いられる多くのの人にとっては、確かに有益な書物であると思う。だが、筆者のささやかな経験を紹介させていただくと、教会の公同の祈祷会の冒頭、この書に収められているカルヴァンの祈りの一つを朗読したところ、祈祷会の祈り全体

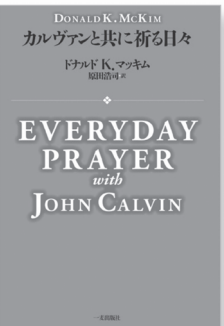
が引き上げられる思いを味わった。忌憚なく書かせていただけは、祈祷会だけでなく、日本の教会の公同の礼拝で祈られている祈りは、はたしてこれで良いと言える様なものになっていくだろうか。霊性において貧しいばかりか、神学的、信仰的内容においても、あまりに貧弱なために、聞くものの心が高く引き上げられ、心が燃やされ、会衆が心からの神への賛美に満たされる祈りが聞かれることは滅多にないと言ったら言い過ぎであろうか。礼拝を導く牧師や長老達が、祈りの修練を積むことが今ほど真剣に求められているときはないのか。この書を通して、日本の教会に豊かな霊性と祈りの充実がもたらされることを著者が心から願っていることを、覚えずにおれない。

(四六判・二二八頁・本体二〇〇円＋税・一麦出版社)



## カルヴァンと共に 祈る日々


ドナルド・K. マッキム  
原田浩司\*訳



祈りをめぐり、  
カルヴァンとマッキムが  
タッグを組んだ！

カルヴァンの珠玉の言葉  
とマッキムの聖書に即した  
黙想によってわたしたち  
を祈りの人へと導く。

四六判  
定価【本体 2,000 + 税】円  
ISBN978-4-86325-126-7



株式会社 一麦出版社  
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10  
TEL (011) 578-5888  
<http://www.ichibaku.co.jp>  
携帯 [mobile.ichibaku.co.jp](http://mobile.ichibaku.co.jp)

# 聖書を物語や小説として 読み解くための手掛かり

〈評者〉**金井美彦**



## 旧約聖書の物語解釈

川中 仁編



言うまでもなく、権威主義的聖書解釈はすでに時代遅れである。聖書を一つの「テキスト」として、あるいは「物語」として読む可能性が開かれるべきだろう。その一つの実現が本書であると言つてよい。

まず、水野隆一氏の「アブラハム物語を読む」。氏はいわゆる文芸批評的アプローチをとるのだが、まとめると次のようなものだ。「意味は読書によって創造される」「テキストの外に解釈の要因を求めない」「唯一の正しい解釈をもとめない」。では、いったいどうなるのかとつい期待してしまふ。そしてその期待を裏切らない。氏はフェミニズム的聖書解釈で知られるフィリス・トリブルの仕事に言及しつつ、アブラハム物語を読み解いていく。目から鱗なのは、アブラハムと二人の妻（正妻サライと側室ハガル）の関係、イシユマエルとイサクに関わる二人の妻の確執、正

妻の優遇、ハガル母子の追放とその後の顛末についての語りの分析から、この物語の隠れた主題がイシユマエルの祝福にあることが示された点だ。線状的に読むだけではわからない、物語の重層性に目が開かれる思いである。

続いて中村信博氏の「ダビデ王位継承物語」の真相――女性たちの悲劇と知恵をめぐって」。氏はサムエル記下九章から列王記上二章までのいわゆる「ダビデの王位継承史」を、「歴史」としてでなく、「物語」として読む。しかも、氏はこの「ダビデの王位継承史」を「ダビデの台頭史」（サム上二六章―サム下八章）から独立した物語と位置付けたうえで、読解を行うのである。その中で氏の一番の関心は、この継承物語における三人の女性にある。バトシェバとタマル、もう一人は「テコア出身の女性」である。中村氏はこの三人の女性たちを描く視点から王位継承の経緯に

いかなる深層が語られているのかを探っていく。

最後に月本昭男氏の論考。氏は歴史書に組み込まれた物語ではなく、独立した一書として伝えられた三つの物語（ルツ記、ヨナ書、エステル記）の構造と主題を探る。まず、物語分析の方法論について概略される。はじめに、鍵語・鍵語句を取り出すことの重要性を指摘する。続いて分析の肝となる修辭法、すなわち「交差配列法」「集中構造」「枠構造」に言及する。ただし、月本氏は分析対象の単位が恣意的となりがちなことなどから、この分析方法にやや懐疑的である。続いてレヴィ・ストロースの構造分析を紹介し、さらにA・J・グレマスの「構造意味論」を取り上げ、彼の取り出した物語構造を高く評価したうえで、それを念頭に三つの物語を分析すると、その構造にうまく当

てはまる。しかし、氏は物語構造分析において確かに「構造」は取り出せるとしても、すなわち、ともにペルシア時代のテキストであるエステル記とルツ記の構造が同じであるとしても、その思想や信仰は全く対照的であるのに、そのことを鮮明にしてくれない点に注意を促す。そして物語論的研究が歴史批判的、思想的の研究によって補われなければならぬことを指摘して閉じている。

宗教史学・考古学・旧約学のすべてに通暁する月本氏が、構造主義的方法による物語分析の大きな可能性と、他方、限界も同時に明らかにしているのは実に興味深い。

以上、簡単にご紹介したが、本書は聖書を文学、特に物語や小説として読み解くための手掛かりとなるのは間違いない。（かない・よしひこ 日本基督教団祐教会牧師）

（四六判・一六七頁・本体一五〇〇円＋税・リットン）



新刊



## 旧約聖書の 物語解釈

上智大学

キリスト教文化研究所

川中 仁編

●四六判並装 167頁

本体 1,500円

本書は、2019年の聖書週間に上智大学にて行われた聖書講座をもとに、書き下ろした論文を収録した。

アブラハム物語を読む  
水野隆一

「ダビデ王位継承物語」  
の深層  
―女性たちの悲劇と  
知恵をめぐって―  
中村信博

旧約聖書における  
物語文学の構造と主題  
月本昭男

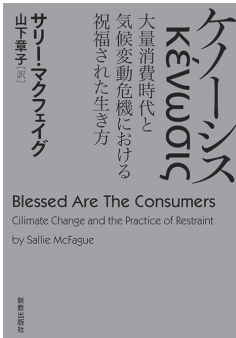
ISBN978-4-86376-082-0

LITHON [リットン]

〒101-0061 千代田区神田三崎町2-9-5-402  
☎03-3238-7678 FAX03-3238-7638

# 人が生き方を変えるためには

〈評者〉 芦名定道



ケノーシス  
大量消費時代と気候変動危機に  
おける祝福された生き方  
サリー・マクフエイグ著  
山下章子訳



現代世界が直面する環境危機と経済危機は、人類にとって、キリスト教にとっても重大かつ緊急の問題である。サリー・マクフエイグは、宗教言語論からエコ・フェミニスト神学まで、現代のアメリカ神学をリードしてきた神学者の一人であり、環境と経済における深刻な危機に対して積極的に発言を行ってきた。このマクフエイグのキリスト教思想を紹介する待ちに待った邦訳がようやく刊行された。それは、マクフエイグの五十年に及ぶ思索の旅のいわば到達点となった著作であり、現代に生きるわたしたちにとって貴重な証言である。

環境危機を論じる中で痛感するのは、頭や理屈でわかっても人間は動かないということである。文明のあり方、現代人の生き方を転換（個人主義的で自己中心的モデルからケノーシスに基づく相互依存的モデルへの回心）宗教なら

いうプロセスであり、マクフエイグはそれぞれ個性的な三人からこのような共通のプロセスを描き取り出してみせない。もちろん、本書で参照されるのは三人の聖人だけではない。マクフエイグにとって、アウグスティヌス、アッシジのフランシスコ、ノリッジのジュリアンらは重要な人物であり、何よりもイエスとその譬え話（良きサマリヤ人）は決定的な役割を果たしている。マクフエイグ自身の「私の証し」（三二―六頁以下）もきわめて興味深い。

以上が本書の骨子であるが、ほかの特筆すべき点についても触れておこう。マクフエイグは、ケノーシスの神学を提示する際に現代の思想動向を踏まえた議論を行っている。「良きサマリヤ人」の解釈は聖書学の新しい成果に基づいており、「個人主義的で自己中心的モデル」と言われ

ではの貢献）しない限り、環境と経済の危機は乗り越えられないとわかっていても、生き方を変えるのは容易でない。変れない自分、おそらくこれが最大の問題である。本書では、この難問に対して、「聖人たち」「聖人」の定義は（一五六頁）の伝記から生き方の転換のための知恵が示される。マクフエイグが目指す聖人は、ジョン・ウルマン、シモーヌ・ヴェイユ、ドロシー・デイの三人であり、本書は、これら三人から、生き方の転換に至るプロセスが次のような四つの段階にかけて詳述され（第1章（第5章）、ケノーシスの神学（イエスの御顔に神を見る）受肉を起点とする神学）へと展開される（第7章）。四つの段階とは、まず自発的貧困（ワイルドスペース）から始まり、次に他者の物質的必要性に注意を注ぎ、これらを土台として普遍的な自己へ成長し、それを個人と公共のレベルに適用すると

る場合の「モデル」概念では現代の宗教言語論が使用される。四つの段階のプロセスから成立するケノーシス・モデルは、キリスト教だけではなく、現代科学の知見と合致しており、マクフエイグは進化論と脳科学の議論を紹介している。また、マクフエイグは東方神学から仏教など世界の諸宗教についても積極的に言及する。これは、現代の危機がキリスト教だけで解決できるものではないことから考えれば、優れた洞察と言えよう。キリスト教と現代科学や諸宗教が共有できる知恵こそが、求められているのである。現代の危機に対して何をなすべきかに関心のある人にとって、聖人でないわたしたちはどうしたらよいかを含め、本書は多くの手がかりを与えてくれるだろう。

（あしな・さだみち）京都大学教授  
（A5判・三九八頁・本体四〇〇円＋税・新教出版社）

新刊

宗教史学論叢 26

## 越境する宗教史

【下巻】

久保田浩・鶴岡賀雄 編  
林 淳・深澤英隆  
細田あや子・渡辺和子

●A5判上製 本体6,000円＋税

鶴岡賀雄「宗教」を越える／木塚隆志神秘主義と黙示録的終末観／出村みや子古代アレクサンドリアの学術研究の系譜に見る「越境」の問題と／深澤英隆「宗教芸術」／「芸術宗教」／細田あや子越境する賢者アダバ／渡辺和子越境する粘土板文書と神／月本昭男大島清先生と大島基金の創設／渡辺和子〈新生〉宗教史研究会と宗教史学論叢／総目次／他11篇

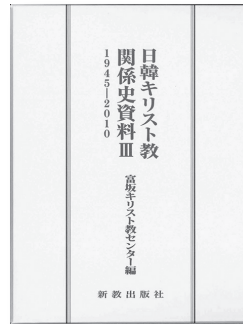
LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区神田三崎町2-9-5-402  
☎ 03-3238-7678 FAX 03-3238-7638



# 日韓関係史研究における 記念碑的業績

〈評者〉 徐 正敏



日韓キリスト教  
関係史資料Ⅲ  
1945-2010  
富坂キリスト教センター編



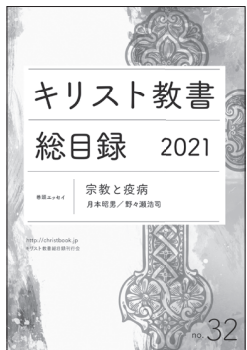
日韓関係史をキリスト教を介して見ることも可能であろう。特にいくつかの側面で、キリスト教が日韓関係史究明のための有効なテーマであることは確かである。一九八四年に第一巻にあたる『日韓キリスト教関係史資料 1876-1922』（小川圭治・池明観編、新教出版社、一九八四、全五六〇頁）が出版された。この資料集は日本側資料しか収録していないという限界があった。しかし同書の有効性は、近代史の不幸な日韓関係を深く究明する資料として、特に一般的には簡単にアクセスできなかった関係資料の多数を閲覧、参照できるようになった点にある。それはキリスト教史の分野に限定されない。第一巻にあたるこの資料集は一九九〇年に韓国語版（キム・ユンオク、ソン・ギョテ共訳、韓国神学研究所、全八七〇頁）も出版され、日韓関係史の研究に大きな貢献を果たしたのである。次に一九九五

年に、『日韓キリスト教関係史資料Ⅱ 1923-1945』（富坂キリスト教センター編、新教出版社、一九九五、全八五〇頁）が出版された。この巻の最大の特徴は、第一巻ではできなかった韓国側資料を収録し、内容的な不完全性を克服した点である。韓国語資料はすべて日本語に翻訳された。同書の有効性は第一巻と同様であるが、さらに韓国側の資料が追加されて、利用価値が拡大された。そしてついに、第二巻から一五年ぶりに、『日韓キリスト教関係史資料Ⅲ 1945-2010』（富坂キリスト教センター編、新教出版社、二〇二〇、全一〇八五頁）が出版された。これは、日韓キリスト教関係史研究における記念碑的な業績である。同書では、日本と韓国の資料をそれぞれ三部のテーマに編成した。第一部「アジア太平洋戦争敗戦から日韓基本条約締結までの交流の動き」（日本側六四編、韓国側三七編）、第

二部「韓国民主化闘争と日韓連帯の動き」（日本側二六七編、韓国側八六編）、第三部「戦後補償問題を含む日韓交わりと統一への模索」（日本側六一編、韓国側二二編）である。収録資料の総数は五二七にのぼった。特に何よりも韓国の民主化運動と、それに対する日本側の連携協力を示す資料が忠実にまとめられた。この資料集の第一巻の編者である池明観は、二〇一五年六月二〇日の明治学院大学での講演で、七〇年代から八〇年代の、韓国民主化運動における日韓キリスト教の同志的な連帯活動の歴史をふりかえり、「東京は最も善き気運を懐胎して、発信するアジアのバリのようであった」と表現した。この第三巻にはその時代の第一次史料が大量に収録されている。日韓キリスト教関係史研究に使命感を抱く研究者たちがこの巻の編集作業に没頭した

のは、池明観の見解に共感したからであろう。このような努力が実って資料集全三巻が完結したのである。現在の日韓関係は戦後最悪だと言われる。こうしたときに、日本と韓国のキリスト教の間に「チームスピリット」が生まれた時代の歴史資料が公刊されたことには大きな意義がある。日韓関係の最も良い伝統が一九七〇年代、韓国民主化運動、そして統一運動と連帯した日本のキリスト教の同志愛からスタートしたのだとすれば、この時代の史料を収めた本書が、日韓関係の新しい扉が開かれる機会となることを期待する。

（ソ・ジョンミン 明治学院大学教授・同キリスト教研究所長）  
（A5判・一〇八五頁・本体一五〇〇円＋税・新教出版社）



# キリスト教書総目録 2021年版

宗教と疫病 巻頭エッセイ 月本昭男氏 野々瀬浩司氏

総記年鑑 辞(事)典 図説年表 全集(著作集) 叢書講座 聖書 聖書学 神学 宗教哲学 思想倫理 伝記(フレイション) 信仰入門書 人生論 説教集 文学小説 評論エッセイ 詩劇 音楽 美術 建築 教育保育 心理 社会福祉 児童 絵本 讃美歌 式文/DVD CD カセット ビデオ/キリスト教関連 雑誌新聞 書名索引/著者索引/掲載出版社名簿

■ A5判 一般頒布1冊286円＋税 送品手数料200円  
■ お近くの書店様でお求めください。

キリスト教書総目録刊行会  
〒162-8710 東京都新宿区  
東五軒町6-24 トーハンビル内  
TEL.03-3266-9521

# キリスト者の「生」の 在り方を問いかける

〈評者〉濱 和弘



神の愛に満たされて  
ケズイック・コンベンション 説教集  
2020  
大井 満責任編集



小さな泉から流れ出た水が、長い道のりを滔々と流れ大河となる。その大河は肥沃な地を生み、そこに文明を築く。私たちはそのことを歴史の営みの中を知る。

ケズイック・コンベンション（以下ケズイック）もまた、この歴史の営みに似ている。一八七五年にイングランド北西の小さな町ケズイックに始まった集会在、一四六年の歳月を経て、今日、日本を含め世界各国で開催される大河となり、キリスト者の霊性を養う肥沃な地となっている。

本書は、その日本でのケズイックの二〇二〇年版説教集である。全体の構成は、バイブルリーディングと呼ばれるキリスト者の生の在り方を問う説教と、キリスト者の霊性を養うための聖会説教、そして教職向け、信徒向けのセミナーや女性集会、ユース集会での説教が収められている。

説教者は外国人・日本人説教者を含め複数に渡るが、あ

を支配し、この世に神の支配が具体的に展開すべき此岸的なものでもある。そのことを、説教者は山上の垂訓から神の義と寛容とに焦点を当てながら力強く語り、私たちの生き方を問い、私たちをこの世へと押し出していく。それは、この世にあって、神に従って生きていく生である。

もつとも、キリスト者の生き方のみが問われるだけならば、それは少々辛い。誰しもが、神に喜ばれる生を生きたいと思うが、それは簡単なことではないからだ。失敗や失望もある。だから、そこには慰めが必要であり、癒しが必要であり、神を信頼することへの励ましが必要である。私たちは、弱さを持った存在なのだ。

本書では、その役割を聖会説教や各セミナーの説教が果たしている。そこでは、神の赦しが語られ、神の愛が語ら

## ヨベルの新刊案内



村椿嘉信「ぎのわん集会代表」  
荒れ地に咲く花 愛すること  
生きることに  
沖繩からの発信！  
荒れ地に花を咲かせるために

ボン・ヘッファーやバルトの翻訳者として著名な牧師が、沖繩の地から、名古屋、静岡等での講演を「いのち」「自然」「知恵」「愛」をモチーフにして、コロナ禍に生きる私たちに語りかける。四六判・一六〇頁・二〇〇円



「高次脳機能障害」となった作者が、その出来事を絵本に託して描く。  
作者 Soiae (ソイア) 絵いっくみい

起き上がり小法師 朗読CD付き  
210 X 210mm  
32頁・1,500円  
交通事故に遭い、「高次脳機能障害」となった作者が、「生きていくだけで十分」との母の言葉を支えに起き上がり、独特の優しさで癒やしの響きのこもった「読み聞かせ」の働きに新たな道を見出していく……。

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp  
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F  
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858  
出版の手引き / 呈 (税別)

えてここではその名を挙げない。説教する人間に価値があるのではなく、説教そのものの内容に価値があるからである。本書には、その珠玉の説教が連なっている。

特に、今回のケズイックは、近年に日本で開催されたケズイックの中でも、特筆すべきものがある。というのも、今回のバイブルリーディングは、「神の国」からキリスト者の生の在り方を問い、考えているからである。

もとより、ケズイックの説教は、キリスト者個人の霊性を養い、個人の変革を図り、敬虔な生き方に導くことに中心を置く。しかし、今回の説教は、神の国の視点から語ることで、さらに強く、神の国の民として、この世の中で具体的に生きることへの自覚を促すものである。

とかく神の国は、天国という死後行く世界として彼岸的に捉えられがちである。しかし、神の国はキリスト者の心

れ、読み手を包み込んでゆく。それこそ、心を神が支配しているのではなく、自分の思いや願いに支配されている人間の現実を示しつつも、そのような私たちを赦し、幼子を教えるように教え導き、励ましながら私たちをキリストの弟子として育まれる神の愛が語られていくのである。

キリスト者は、キリストの証人としてこの世に押し出されて行くと同時に、この世から引き出され、慰め癒されなければならぬ存在でもある。本書は、一つの書として、この二つの対極を語る極めてバランスが取れた説教集であり、キリストの真実に溢れた肥沃な霊の糧の地である。

(はま・かずひろ // 日本ホーリネス教団小金井福音キリスト教会牧師)

(四六判・一六八頁・本体一三〇〇円＋税・ヨベル)



# 平易で読みやすい 愛に満ちあふれたメッセージ

〈評者〉 大井 満



## 旧約聖書の世界

そのゆたかなメッセージに聴く  
長田栄一著



説教者は一度の説教のために、どれだけの時間と労力と祈りを費やすのだろうか。聖書と向き合い、聴衆である教会員について思い巡らし、語るべき言葉が与えられるように祈る。長田牧師が著された本書は、まさに説教者の学びと祈りによって紡がれている。そしてそれを聞いた教会員たちによって、輝きが何倍にも増幅されて光を放つ聖書のメッセージである。

本書は、各章ごとに一人の旧約聖書の登場人物に焦点を当てた59編の説教である。しかしそれは単なる説教ではない。28人(組)の人物によって、旧約聖書の中心的なメッセージが浮かび上がらせられるのみならず、創世記からマラキ書までを貫いて流れる救済史的なメッセージともなっているのだ。

取り上げられているのは、アダムとエバ(4回)、カインとアベル、ノア、アブラハム(4回)、イサク(2回)、ヤコブ(3回)、ヨセフ、モーセ(8回)、ヨシユア(2回)、ギデオン、サムソン、ルツ、サムエル(3回)、サウル、ダビデ(3回)、ソロモン(2回)、エリヤ(3回)、エリシヤ、ヒゼキヤ、ゼデキヤ、エズラとネヘミヤ、エステル、イザヤ(2回)、エレミヤ、エゼキエル、ダニエル、ヨナ、マラキ。詩歌を取り扱う第三部では特定の人物ではなく、各書ごとに1章が割り当てられている。

1章あたりの長さは平均6ページに収められており、文体系はもちろん、そのメッセージも読みやすく平易である。聴衆である教会員たちへの、著者の愛に満ちた眼差しがあつてこそこのメッセージである。

また、各章のメッセージの終わりには、それぞれ三つの

質問が付されており、読者は読んだことをもう一度自らに問うことができるようになっていく。たとえば、第4章の冒頭で、「創世記三章を読みますと、彼らがその木の実を食べたとき、彼らはやがて死にりましたが、すぐには死にませんでした。そこで一つの疑問が起ります。『死とは何か』ということですか」と述べ、死について語られた後、最後の質問で、「死について、深く考えたことがありますか」と問われるのである。これによって読者は、説教を読むことに加えて、さらに語られたテーマを自分への問いとして咀嚼するチャンスが与えられているのだ。

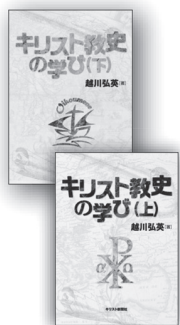
ぜひ本書を、ひとりでも多くの教会員、信徒はもちろんだこと、信仰を求めている人々にも読んでいただきたいと、

心からお勧めする。聞くところによると新約編も準備されているとか。本書を通して旧約聖書のゆたかなメッセージに聴き、祝福にあずかる人々が、ひとりでも多く与えられるようにと願っている。

(お問い合わせ) 日本キリスト合同教会板橋教会主任牧師、お茶の水聖書学院学院長

(四六判・三七六頁・本体一八〇〇円+税・ヨベル)

キリスト教の歴史を概観する  
最良の入門書



# キリスト教史の学び

日本基督教団教師  
同志社大学キリスト教文化センター教員  
越川弘英 著



キリスト教の母体となったユダヤ教の歴史から、キリスト教の誕生と発展、古代ローマ帝国時代から中世ヨーロッパにおける「キリスト教世界」の成立。そして宗教改革を経て近現代の、バルト、ボンヘッフアー、マザーテレサ、教皇フランシスコの時代まで。それぞれの時代の社会におけるキリスト教会の存在と活動、その中で重要な働きを担った象徴的な人物の働きや思想を取りあげながら、キリスト教の通史を分かりやすく解説する。



【上巻】 A5判・312頁  
本体 2,000円+税  
【下巻】 A5判・346頁  
本体 2,200円+税

キリスト新聞社 since 1946  
169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18  
AVACOビル6階 TEL 03-5579-2432

## 場所的聖霊論の論文

〈評者〉 関川泰寛



### 聖霊と霊性

心の深みで  
栗田英昭著



本書は、「聖霊と霊性」をめぐる著者の論文集である。二〇〇八年から二〇一八年までにすでに発表された論文がほぼそのまま年順に収められている。収録されている論文は、以下の通りである。「十分に展開された聖霊論の必要性について」「神と人の関係」「西田哲学のキリスト教的展開」「聖霊の内住」「キリストとわたしの神秘的合一の場所論的理解」「ファン・ルーラーの聖霊論と場所論的理解」「聖霊論的思考について」「植村正久における霊性と場所論的理解」「まこと信仰とは何か」。

これらの諸論文は、現代の聖霊論の展開を知るための貴重な論考であり独立しても読むことができるが、全体を通して読むことで著者の問題意識を明確に知ることができる。著者の問題意識とは、二十世紀を代表するオランダの改革派の神学者ファン・ルーラーが「神律的相互関係」と名

付けた概念に導かれて、聖霊と人間の霊性の関係を明らかにすることによって、三位一体論的な聖霊理解の深化という現代神学の課題に答えることである。

この課題に答えるために、著者は、伝統的な西方神学、東方神学の歴史的な遺産の解明という道ではなくて、むしろ日本の神学と哲学の鉅脈の中に手掛かりをさぐっていく。ファン・ルーラーの聖霊論と霊性論とともに、植村正久の思想や西田幾太郎、小野寺功の「場所論」や「場所論的理解」を論じているのもそのためである。単純化して言えば、本論文集を貫くのは、神が聖霊として人間に働きかけてきたと、人間の霊性の深みにまで触れる場合に、ファン・ルーラーの語る神主導の（つまり神律的）相互作用が起りながら、聖霊を注がれる人間の主体性もまた担保される認識的な原理の解明への関心である。著者は、この関心ゆ

えに、霊性という場所上の事実の認識と自覚、さらには、聖霊論的な思考の論理を包むものとしての場所的な論理が、ファン・ルーラーの概念をより鮮明にすると言じていく。なるほど、聖霊理解の最奥には、聖霊と霊性の結びつき、認識の問題が常に横たわっており、この問題を避けて通ることとはできない。その意味で著者は、聖霊論の問題を、ただちに教会論やキリスト論の神学的、実践的な課題との関わりで論じるのではなくて、聖霊と霊性という存在と認識の問題に集中させたと行ってよいであろう。

カール・バルト以降の現代神学の課題は、聖霊論を三位一体論的に展開するところにある。翻って歴史を一瞥するならば、すでに宗教改革者たちの中に、神と人との質的差異を強調するあまり、人間の霊性への関心が薄れていった事

情が存在した。改革派の神学者たちは、人間の霊の働きを論じることに躊躇し、人間の霊の働きは受動的であり、霊の特徴である動的な理解を見失っていったようにも見える。二十世紀後半には、バルト神学への批判が東方の神学者から提示され、さらにはモルトマンらもバルト批判の矛盾を、彼の聖霊論の欠落やフィリコエ擁護に向けるようになる。評者もそのような現代神学の動向分析に異論はない。しかし、改革派神学が忘却してきた鉅脈の中にも、現代神学の課題を解決する鍵はないのだろうか。本論文集を読む者は、このような問いを突き付けられる。現代日本で聖霊論に関心を寄せる者には、必読の書物となるであろう。

（せきかわ・やすひろ 日本基督教団大森めぐみ教会牧師）  
（A5判・二三六頁・本体三八〇〇円＋税・一麦出版社）



# 聖霊と霊性

心の深みで

栗田英昭  
KURITA Hideaki



三位一体の神である  
聖霊の働く場所は  
人間の霊性。  
場所的聖霊論。

A5判・上製  
定価【本体3,800＋税】円  
ISBN978-4-86325-125-0



株式会社 一麦出版社  
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10  
TEL (011) 578-5888  
<https://www.ichibaku.co.jp>  
携帯 [mobile.ichibaku.co.jp](https://mobile.ichibaku.co.jp)

## 女性の人生も大切だ！ 聖書の豊かさを再発見

〈評者〉キスト岡崎さゆり



ヒロインたちの  
聖書ものがたり  
キリスト教は女性を  
どう語ってきたか  
福嶋裕子著



本書は、旧・新約聖書の壮大な物語を女性たちの人生に焦点をあてつつ追っている。それも、著者が教鞭を執っている理工学部の大学生たちにとって決して宗教臭くなく、かつ毎週の礼拝説教者にも「そう来たか！」と膝を打たせる説得力を発揮しつつ。馴染み深い物語が、どこかミステリータッチで解き明かされる解釈が面白い。一部取り上げてみよう。サラ「側女つまりは奴隷の屈辱を味わった」、リベカ「アブラハムの生き方を引き継いだのは、嫁のリベカではなからうか」、レア「ヤコブは、結婚のはじめからレアを愛していた」。どうということ？と思ったら本書を読み進めてほしい。四〇人の女性たちがあたかも身近な知り合いのように思えてきて、その人生に興味がわくはずだ。

「ひよっとしたら？」と。

そこには人格や心を見無視された女性の悲しみもある。ヤ

コブの娘デイナ、エフタの娘、ダビデの娘タマルをはじめ、男性主権ゆえの性暴力や死にさらされている者は数多い。特に心に残るのは、バト・シエバとウリヤの物語だ。ナタンのたとえ話の「小羊」とは実は誰を指すか。権力者ダビデにレイプされ姦淫の罪に苦しむ妻に、ウリヤが望んだこととは……。かのじよにとって「ウリヤの妻」であることが、さいごまで心の支えだったのではなからうか」と結ばれている。聖書学者の著者は、のちにダビデの側女をレイプするようアブシヤロムに提案したのは、バト・シエバの祖父であることを指摘するのを忘れない。ミス터리で言えば、聖書を丁寧に読むと伏線が張り巡らされているというところである。

意外な評価を受けているのは、エン・ドルの口寄せの女である。禁忌の降霊術を行うが、絶望したサウル王を慰め

食事で力づける。このかのじよ自身の言葉と行いに「神の真実があった」。他にも、シユネムの女や預言者フルダ、架空のユデイトにも新時代の幕開けを見ている。

新約聖書では、「イエスにとって目からうるこ」となる発言をしたシリア・フェニキアの女や、礼拝の普遍性を受け入れたサマリアの女が印象に残る。また、マルタら三きようだいのそれぞれの持ち味を生かした「弟子」の姿が「理想の教会共同体」であると覺えたい。

そして何と言ってもマグダラのマリアである。イエスと全行程を共にし、信仰とヴィジョンを深く共有していた弟子であるかのじよが、「悔い改めた娼婦」という美談まがいの事実無根な誤解を受け続ける事実には、「女性」の本質に対する典型的な差別構造がある。最後に占いの女奴隷に触れ、忘れ去られた女たちがいることを示唆しつつ閉じられる。

「本書は、フェミニストの聖書学者たちの解釈に負うところ

ろが大き」とある。女性軽視の偏見は聖書の時代から現代まで脈打っているのは確かである。しかし著者は、聖書の女性たちを過剰にかばい持ち上げるのではなく、欠点も痛みも誇りもある人格として、見落とされがちな人物たちに目を向けているのだ。かのじよたちは偉大な男性が神の使命を遂行する上での脇役ではない。人は皆、自分の人生の主役を生きている。神の目に「あなたは尊い」と言われる存在なのである。信仰者ではない読者も、「こんな人も聖書にいいのか」と思って読めれば、それが自分自身だと気づくだろう。知的興味をそそる客観的な語り口の中に、あたたかい視線と神の愛への信頼、そして平和への希求が立ち現れている。

(きすとおかざき・さゆり)アメリカ改革派教会宣教師、日本基督教団久ヶ原教会副牧師

(四六判・三〇二頁・本体二七〇〇円＋税・ヘウレーカ)



# これからの宗教改革研究に 必携の書

〈評者〉森田安一



宗教改革の  
知的な諸起源  
A・E・マクグラス著  
矢内義頭、辻内宣博  
平野和歌子訳



筆者がマクグラスの翻訳書を最初に手にしたのは二〇年前のことだった。それは『宗教改革の思想』（高柳俊一訳、教文館、二〇〇〇年刊）で、その頃マクグラスは日本ではほとんど知られていなかった。その後『ジャン・カルヴァンの生涯』や『ルターの十字架の神学』など主要著書を含め三〇冊に近い翻訳書が出版された。中でも本訳書『諸起源』は高度な研究書で、参考文献表と註だけでも一〇〇頁に及んでいる。

本訳書は、後期中世の二つの大きな知的運動であるスコラ学と人文主義を詳細に追究し、宗教改革の知的起源がどこにあるかを明らかにしている。ルターの宗教改革について言えば、「後期中世思想（スコラ学）の枠組みとの根本的な断絶というよりは、むしろその内部での展開」とみる。もちろんスコラ学は一枚岩ではなく、多様性に富み、ル

ターのよって立ったのは「新アウグスティヌス学派」だった。ルター神学は古いスコラ学への学問論争から生まれ、もっぱら義化（義認）の教理に向かった。

一方、ルター宗教改革と人文主義との関係はどうであろうか。人文主義は中世の知的エリート層に大きな影響力を持ち、後期中世の敬虔、神学に重要な潜在的影響を持っていたが、ルターは人文主義そのものには関心を持たなかった。彼の神学の主要な特徴はエラスムスの『校訂版新約聖書』の出版以前にすでに定まっていた。ルターは、人文主義者たちが「源泉に戻れ」の精神で編んだアウグスティヌスの作品や新約聖書を利用して、人文主義のもたらした成果を大いに利用したにすぎない。「人文主義が、ルターの神学的諸起源に決定的と言えるほどの強い影響を及ぼさなかった」と結論される。

ところが、チューリヒの宗教改革者ツヴィングリの場合にはまったく異なっていた。彼は後期中世のスコラ学とはほとんど無縁で、スイス人文主義の頂点に立ち、エラスムス流の「再生するキリスト教」という人文主義のヴィジョンを追求した。義化の教理よりは「キリスト者の宗教とは、……キリストの模範に従う清い生活に他ならない」と主張した。彼の主張はエラスムスの「キリストの哲学」を思わせ、改革当初には道徳的・倫理的再生が色濃く出ていた。

このように同じ宗教改革者でも、ヴィッテンベルクとチューリヒではその歴史的、神学的な諸起源をまったく異なる思想の潮流に負っている。それは一五二九年のマールブルク会談で両者が一致できなかった理由を説明するものであろう。

本書の関心は、主としてルターとツヴィングリの宗教思想を追究し、宗教改革は後期中世のさまざままで複雑な異種混交的母体から生まれたと結論する。そして、宗教改革の基礎をなす異種混交性がさまざまな差異を持つ改革運動を各地に生んでいくことになるという。壮大かつ緻密な研究である本訳書は今後の宗教改革研究に必携の書となる。

（もりた・やすかず 日本女子大学名誉教授）  
（A5判・三七六頁・本体四八〇〇円＋税・教文館）



# 日本キリスト教歴史人名事典

鈴木範久 監修 日本キリスト教歴史大事典編集委員会 編 呈・内容見本

最新の研究成果や新事実を反映した約5150人のキリスト教関係者を網羅。日本キリスト教史研究の里程碑ともいえるべき必須の基礎文献。

好評発売中

●B5判・函入・984頁・本体45,000円



教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座 4-5-1  
☎03-3561-5549 FAX 03-5250-5107

# 絵本と子育てをめぐるエッセイ

〈評者〉久米小百合



## 絵本へのとびら

大嶋裕香



世界には様々な「扉」が存在しますが、この扉ほど開ける前からワクワクし私たちを夢語りの国へと誘ってくれる扉はないでしょう。扉に手をかけるのは子供たちばかりとは限りません。コロナ禍ですっかり疲れたお父さんも、日々の育児や雑用に追われているお母さんも、ひとたび絵本の扉を開けた途端なんだかニヤニヤしたり、わけもなく暖かい想いに包まれたり、そう、絵本とはまるで心で飲むホットココアのような飲み物！ いや読み物だとつくづく思います。だから小さな手でも不思議の国がのぞけるように絵本の扉はあえて「とびら」と優しいひらがなになっているのかもしれないね。

本書の著者は、結婚や育児などの家庭生活に関する著書やセミナー講師も務められ、牧師夫人でもある大嶋裕香さんです。執筆活動や講演のみならず、ご自宅でパンの教室

の昭和の懐かしい東京の陽射しの中で、たくさんの絵本や手遊び歌で育った少女が、やがて生涯の伴侶と出会いいつしか母となり子供たちへ読み聞かせる側になるのです。

この家族のアルバムはきつと読者の皆さんの心の中にも一冊はあるのでは。私も息子が小さい時の、なんとも無邪気でのんびりとした午後を思い出したりしました。

すっかり大人になると忘れちゃいますが、色を覚える、形を知る、数を数える、みんな絵本に教わっていたんですね。第一部で登場するたくさん作品はみなさんのお宅の本棚にもあるかもしれませんよ。我が家にも今では埃をかぶったままの可愛い表紙が数冊、『しろくまちゃんのおはつとけーき』やディック・ブルーナのシリーズなど捨てられずに残っています。

を開催されていたほどのお料理上手でもある方。実は裕香さんとはキリスト者の著書をご紹介する福音番組で数回一緒に一緒に機会に恵まれました。多才なのに気さくで柔らかく、そんな雰囲気の指先から次はどんな作品が生まれるのか楽しみにしていたところでした。

本書は絵本の世界へと道案内してくれる第一部の「絵本へのとびら」と、絵本の中でしか出会えない名言を集めた第二部の「言葉との出会い」の二部構成になっています。一部では著者の裕香さんご自身の幼少時代にまで遡り、どんな時にどんな風に絵本と出会い楽しんで来られたのかを知ることが出来ます。週刊誌の編集者であったお父様と薬剤師のお母様、絵に描いたような文系理系のご両親こそ、計量や発酵温度が難しいパン作りと文章を紡ぎ出す裕香さんのセンスなんだと妙に納得してしまいました。そしてあ

さて裕香さんが紹介された作品の中であつておきの、それもかなりレアな作品をひとつあげさせていただきます。それは「春風美容院」という作品です。素敵なタイトルですが、誰の作品かと思いきやなんと娘さんが小学生の時に書いた創作のお話でした！ 既に活字離れ、ネット、ゲーム、LINE世代のど真ん中と思われるお嬢さんが、こんな軽やかでユニークなストーリーを生み出したなんてびっくり、頭が下がります。どんなお話か気になると思いますがネタバレになりますのでここではお伝えできません。どうぞ皆さんもGo to 「絵本のとびら」の旅へ、期限はありません、ワクワクドキドキが待っています。

（くめ・さゆりミュージックミッションナリー）  
（四六変型判・一二八頁・本体一〇〇〇円＋税・教文館）



# さまよう羊

ヤコブとルツの物語  
フラミュンスター教会説教集 II  
ニクラウス・ペーター  
Niklaus Peter  
大石周平\*訳



さまよう羊  
ニクラウス・ペーター 大石周平\*訳  
フラミュンスターの物語

きょうだいとの和解への道に  
突き動かされた夢みる詐欺師  
ヤコブ。しなやかに、かつた  
たかに生きる寄留の未亡人  
ルツとナオミ。さまよう羊に  
約束された神の祝福のものが  
たり。私たちがふだん語り合  
う言葉で説き明かされる。

四六判  
定価【本体 1,600 + 税】円  
ISBN978-4-86325-127-4



株式会社 一麦出版社  
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10  
TEL (011) 578-5888  
<http://www.ichibaku.co.jp>  
携帯 [mobile.ichibaku.co.jp](http://mobile.ichibaku.co.jp)



書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jb-shop.com	sasaki@jb-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用		zenrinkan_syoten_0530@afso.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台市青葉区1-36 敷島センター・1771F	022-223-2736	共用		fqcwks24@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉県船橋市2-5 榎ヶ丘センタービル	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
聖公書店	350-1331	埼玉県狭山市新狭山1-5-1	042-900-2771	042-900-2722		seikoshoten@bible.or.jp	00160-2-18410
アパコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00130-0-96398
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://taisindo-books.jimbo.com/	taisindo@icom.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス南青山	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3567-1995	03-3567-4435	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.biglobe.jp/~yohatara.cbs/index.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋市千種区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://nagoya-seibunshita.cococan.jp/	nagoya-seibunshita@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東1-1	075-211-6675	075-211-2834	http://web.kyoto-net.or.jp/people/kjordan/	kjordan@mbox.kyoto-net.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0013	大阪市北区茶屋町2-30	06-6377-6026	06-6377-6027	http://osakacbs.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
バイブルハウスびぶるすの森	591-8041	堺市北区東雲東町1-1-16	072-257-0909	072-253-6132		sakai-jbs@bible.or.jp	00160-2-18410
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三陽ビル2F	078-331-7569	078-945-9388		kobex@nikkihan.co.jp	00170-2-421390
広島聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
徳島キリスト教書店	770-0052	徳島市中島田町3-57-1	088-633-6335	共用	http://www6.ocn.ne.jp/~tcs/	tokushoten@shirt.ocn.ne.jp	01630-5-37119
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一万町1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.geocities.jp/masujama_1007/mexim	sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
北九州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上雷野5-2-18	093-967-0321	共用		kbookcenter@bible.or.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.sinseikan.jp/	info@sinseikan.jp	01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用		k-haleruya@bible.or.jp	00160-2-18410
沖縄キリスト教書店	903-0207	中環郡読字翁張777 沖縄キリスト教館内	098-943-7221	共用	http://www.okinawacbs.com/	okinawacbs@yahoo.co.jp	020308-1283

※一般書店関係の方は 日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

## ■日本キリスト教団出版局

### 信仰生活ガイド《第5回》最終回配本》

### 信じる生き方

増田 琴編

信仰生活を送るにあたって踏まえておきたい記事14本を収録。礼拝の喜びや祈りの心構え、聖書の読み方といった日々の歩みから、悲しみとの向き合い方、多宗教社会における信仰生活のあり方、隣人と共に生きる姿勢にいたるまで、多岐にわたって取り上げる。

四六判・128頁・本体1300円

## INFORMATION

### 近刊情報

## ■新教出版社

### 神の言葉と契約

——出エジプト記19―24章の研究

大野恵正著

モーセ五書の中心問題（神顕現、十戒、契約の書、そして神と民の契約）を記す基層資料の研究。それらが、申命記主義者によって信仰文書としての高みへと決定的に引き上げられ、さらにヤハウィスト、祭司資料編纂者によって現在の形に整えられた消息を明らかにする。

A5判・536頁・本体予価6000円

## 日本における讃美歌 Hymnology in Japan

手代木俊二著

近代以降の日本における讃美歌・讃美歌集の歴史についての論考と、研究の先達たちの論文翻訳をまとめた集大成。明治期の讃美歌・聖歌、琉球語讃美歌に関する論考、讃美歌史上の重要人物である松本幹、鳥居忠五郎、安部正義、G・オルチンに関する小論などを収録。

A5判・506頁・本体6500円

## ■教文館

### ナチ時代に旧約聖書を読む

——フォン・ラート講演集

G・フォン・ラート著／荒井章三編訳

反ユダヤを掲げるナチに抗して、旧約聖書の重要性を説いた旧約聖書学者の珠玉の講演集。

四六判・208頁・本体2100円

# 福音と世界

2021年3月号

特集 死刑なき世界へ

寄稿者 守中高明、田鎖麻衣子、市野川容孝

太田昌国、清未愛砂、石原明子

書評 富坂キリスト教センター編「日韓キリスト教関係史資料Ⅲ」（西原廉太）／新連載 古代イストラエル文学史序説（勝村弘也）／好評連載 有住航、村澤真保呂、栗田隆子、金退野、好井裕明、マニユエル・ヤン、土井健司、辻学

A5判・本体600円・〒70円

定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL: 03-3260-6148

Email: sales@shinkyō-pb.com

## 編集室から

推薦なさり、その際、ストーリーが掲載された資料を個人的にいただいた。

冒頭に書かれた生まれだてのうんちの表現がリアルで印象深い。うんちは悩んだり傷ついたり自虐的になったりしながら神さまの愛に気づき、最後はたんぽぽの養分となって生涯を終える。うんちという言葉に抵抗を覚えながら読んだ。

オープンして間もない頃の「うんこミュージアム」関係者が、盛況な中インタビューに応じていたことによると、子

小誌二〇二二年一月号の巻頭エッセイ「出会い・本・人」で、作家の

きどのりこ先生が絵本『こいぬの

うんち』（平凡社）をご紹介された。

きど先生は私が数年前にご依頼し

た講演会でも『こいぬのうんち』を

## 予告

本のひろば

2021年4月号

本・批評と紹介

（巻頭エッセイ）「キリスト教と恋愛」小檜山ルイ、（書評）荒瀬牧彦編「新版・教会暦による説教集（イースターへの旅路）」、関西学院大学神学部編「関西学院大学神学部ブックレット 音楽と宣教と教会」、上垣 勝著「テゼ共同体と出会って」、加藤常昭著「新約聖書書簡の説教2」、片柳弘史著「やさしさの贈り物」他

どもはうんちが大好きなのだそうだ。また、「うんこドリル」という小学生用の学習教材もベストセラーを記録し、学力向上に貢献しているらしい。もつとも、最初の出版はクレーム覚悟のかなり勇気が必要な挑戦だったとのこと。勇気も柔軟性もない私は、こんな話を聞くと自身のつまらなさに落胆してしまふ。

作者の権正生は韓国<sup>クオソルシオン</sup>の童話作家。一月号でもご紹介していた通り、約五十年前に日曜学校教師をしながら物語を書き、韓国の第一回キリスト教児童文学賞で認められた。

神さまの愛をうんちに語らせる。咎められそうだけれど、子どもたちが楽しそうに興奮するようすも目に浮かぶ。韓国で約半世紀に渡って受け継がれる作品は、言葉のインパクトに止まらず、生涯を教会活動に献げた作者の愛が養分となって育ったのかもしれない。（吉崎）

# キリスト者として生きる

洗礼、聖書、聖餐、祈り

ローワン・ウィリアムズ 著 ネルソン橋本 ジョンユア 諒訳

西原廉太 監訳



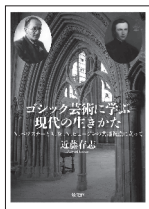
キリスト者として生きる  
洗礼、聖書、聖餐、祈り  
ネルソン・ウィリアムズ著  
橋本ジョンユア諒訳  
西原廉太監訳

この世界で本当に人間らしくあるために、私たちはどう生きればよいのか。第104代カンタベリー大主教が、キリスト者としてまだキリスト者でないすべての人のために深くやさしく解き明かす最良の信仰入門。

● 四六判・並製・136頁・本体1,600円

# ゴシック芸術に学ぶ現代の生きかた

N・ペヴスナーとA・W・N・ピュージンの共通視点に立って



ゴシック芸術に学ぶ現代の生きかた  
N・ペヴスナーとA・W・N・ピュージン  
近藤存志著

近藤存志 著

美術史家ペヴスナーと建築家ピュージン。中世ゴシック芸術の創造者たちの謙遜を称揚するふたりの言葉から、神律的社  
会から乖離した現代における芸術創造のあるべき姿を考える。

● A5判・並製・120頁・本体1,200円

# 日本キリスト教歴史人名事典

鈴木範久 監修 日本キリスト教歴史大事典編集委員会 編

呈・内容見本

好評発売中!

最新の研究成果や新事実を反映した約5,500人のキリスト教関係者を網羅。日本キリスト教史研究の里程碑ともいべき必須の基礎文献。

● B5判・函入・984頁・本体45,000円



# 使徒言行録講話

加藤常昭説教全集31

第IV期第4回配本

加藤常昭 著



ラジオ放送FEB Cで語られた聖書講話を収録。主イエスの生涯を独特の美しい言葉で綴ったルカが、その後の教会の伝道の歩みを生きたと描いた使徒言行録のメッセージを明快に語る。

● 四六判・上製・466頁・本体3,900円

## 「加藤常昭説教全集」第IV期(全7巻)

\* 第IV期は当初6冊の刊行予定でしたが、第37巻として「旧約聖書・福音書の説教」を刊行することになり、全7巻になります。

- 【続刊のご案内】(2か月に1冊刊行予定)
- 第32巻 コリントの信徒への手紙一講話(4月刊行予定)
  - 第33巻 コリントの信徒への手紙二講話(6月刊行予定)
  - 第37巻 旧約聖書・福音書の説教(8月刊行予定)



# ヒップホップ・アナムネーシス

山下壮起・二木信編著

ラップミュージックの救済

2月25日

気鏡の執筆陣の論考・小説やブラック・ライヴズ・マター運動と共闘する黒人牧師の説教、日本で活躍する6名のインタビュイーなどを収録した充実の内容。  
◆A5変型判・本体2400円

# ジーザス・イン・デイズ・ニールランド

ポストモダンの宗教、消費主義、テクノロジー

1月25日

デイヴィッド・ライアン著／大畑凜、小泉空、芳賀達彦、渡辺翔平訳

世俗化論の想定に反して多様な宗教実践が開花しているポストモダン社会。監視社会論の泰斗がその謎と新たな宗教の可能性に迫る。現代を生きる信仰とは？  
◆四六判・本体3500円

# カール・バルト研究

絶対的逆説を指さす神学

1月25日

宇都宮輝夫著

聖書解釈学という切り口から見えてくるもの、弁証法やアナロギアを通して浮かび上がるバルトの福音理解など、半世紀に及ぶ研究の総決算。  
◆A5判・本体3600円

# ケノーシシス

大量消費時代と気候変動危機における祝福された生き方

反響！

サリー・マクフエイグ著／山下章子訳 自己を空しくするという生き方。エコフェミニスト神学を力強く牽引してきた著者の、生前最後となった渾身の書。  
◆A5判・本体4000円

# 日韓キリスト教関係史資料Ⅲ

反響！

1945―2010

富坂キリスト教センター編

日韓の貴重な資料500点以上を収録。日本敗戦から日韓基本条約締結までの交流を第I部、韓国民民主化闘争と日韓連帯の動きを第II部、戦後補償問題を含む日韓の交わりと統一への模索を第III部とする。とりわけ民主化運動資料は他の追従を許さぬ充実。  
◆A5判・本体15000円

## 教義学要綱

カール・バルト著／天野有、宮田光雄訳  
【ハンディ版】 ◆小 B6判・本体2000円

戦後間もないボン大学で、敗戦に打ちひしがれるドイツの学生たちに語られた、使徒信条に基づく教義学の入門講義。あらゆる人々に神学の魅力を存分に伝える名著を、最新の研究に基づく達意の新訳で贈る。大好評！



一九五七年七月一日 第三種郵便物認可  
二〇二二年三月一日発行 毎月一回一日発行  
本のひろば 第七五九号 二〇二二年三月号

発行所 〒162-0814 東京都新宿区新小川町9-1 一般財団法人キリスト教文書センター  
電話03-3361-6511 振替00117-0511 一六七九  
発行人 金子和人 編集人 寺田彰 印刷所 佛平河工業社  
発売所 日本キリスト教書販株式会社 電話03-3361-6511 一六七九

定価七八円(税抜七一円) 71円  
一年分一三〇〇円(送料共)